

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00946

研究課題名（和文）近現代日本における生業と生活世界に関する実証的研究

研究課題名（英文）An empirical study of the Subsistence and Lifeworld in Modern Japan

研究代表者

沼尻 晃伸（NUMAJIRI, AKINOBU）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：30273155

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は、主に二点にまとめられる。

第一に、山間部に住む石工の日記史料の分析を通して、1920年代から第二次世界大戦期にかけての生業と生活の内容とその担い手について、妻の出産や家族が病気の際の対応と関連づけて動態的に明らかにした。第二に、1920年代と高度経済成長期における人びとによる生業や生活と結びついた山野や水辺利用が可能となった一つの要因として、土地所有者・管理者による利用者や利用自体の価値の承認が重要であった点を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、以下の二点にまとめられる。

第一に、茶・山葵・穀類などの生産から焼畑、草や薪の採取と運搬など生業の具体的内容を明らかにしつつ、家族構成員別の生業への関わりやケアの関係を、家族の外側の家々との関係性を踏まえて動態的に明らかにした点である。

第二に、人的支配関係とは異なる、「価値の承認」を媒介とした関係性（土地所有者との関係や自治体との関係など）に注目し、そのことを通して生業や生活に必要な土地利用が可能となったことを明らかにした点である。

研究成果の概要（英文）：The results of this research can be summarized into two main points.

First, we used the historical diary of a mason who lived in a mountainous region to clarify his subsistence and way of life in relation to family events, such as childbirth and family illness during the 1920s to World War II. Secondly, the study clarified that the recognition by landowners of the value of users and use itself as one of the factors that enabled people to use mountains and waterfront areas in connection with their subsistence and way of life in the 1920s and during the period of rapid economic growth.

研究分野：日本近現代史

キーワード：生業 生活世界 日記 石工 山野 水辺 家族周期 女性

## 様式 C-19、F-19-1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1)研究開始当初において、民衆の生産と生活を対象とした歴史学研究には、2つの特徴がみられた。第一に、日本中近世史研究において、生活を維持し生き抜くための生産活動の全体像を分析する方法として生業史が提起されていた点である(井原今朝男「生業から民衆生活史をふかめる」国立歴史民俗博物館編『生業から見る日本史』吉川弘文館、2008年)。日本近現代史研究においても、この考え方を取り入れる研究が登場していた(高橋美貴『「資源繁殖」の時代と日本の漁業』山川出版社、2007年など)。第二に、日本近現代史研究における歴史認識の方法として、民衆の生活世界に関する研究の必要性が主張されるようになった点である(安丸良夫「二〇世紀日本の経験」加藤哲郎・渡辺雅男編『20世紀の夢と現実』彩流社、2002年)。

(2)研究代表者は、この間、日記史料を用いたミクロ的な歴史分析手法に基づいて、主に以下の2つのテーマを追究してきた。一つは、ヨーロッパ史との比較を念頭においた農家を対象とした家族史である。もう一つは、人と水との関係を中心とした環境史である。この両研究によってミクロ歴史研究を実証的に解明する手法を鍛えることができ、新たな日記史料を発掘することができた。そのような自己の研究の到達点から上述の歴史学の研究動向を振り返ると、「生業史」という観点から改めて日記史料を検討し、これまで分析の対象とすることができなかった種々多様な生産や運搬などの営み総体を分析対象とし、そのことと生活との関連を検討すれば、「生業史」が対象とする民衆の生活維持や生活を生き抜くための営みを、家族関係などの社会的諸関係のなかに位置づけて理解することが可能となり、同時に生活世界の実証的研究となることに思い至った。

### 2. 研究の目的

本研究は、20世紀の日本を対象とし、日記史料などを用いたミクロ歴史研究の手法を用いて、人々の生業とそこから導き出される生活世界を動的に解明することを課題とする。具体的には、大正期から20世紀後半にかけての時期を設定し、(1)日記に記されている多様な仕事を総体として解明するとともに、(2)矛盾を抱えつつもそれらの仕事を可能とした家族内分業と種々の社会関係(同族関係、姻戚関係、近隣関係、同職集団など)及び市場的關係を究明することで、日記史料からみえてくる生活世界の有り様を追究する。そのうえで(3)家族の変化と、種々の災害、恐慌、戦争などに直面するなかで、生業はいかに生活維持の営みとしての意味を有したのか否かを動的に解明する。なお、本研究は、コロナウィルスの感染拡大の影響により、2020年度から2021年度にかけて実地調査の実施が困難な状態が続いた。そのため、後述するように、当初計画を一部変更した。

### 3. 研究の方法

(1)本研究の方法は、当初以下の2つの点を中心に進めた。

研究対象地(静岡県静岡市)で既に収集していた日記史料(『鉄五郎日記』)の翻刻を行った。その上で、翻刻されたデータをもとに、生業を「家仕事」と「雇われ仕事」に分類し、さらに「家仕事」を、「農作業」(山葵生産、茶栽培・茶摘みを含む)、「木竹等伐採・採取、薪拵え」、「運搬」などに分類して、上記日記の書き手である鉄五郎やその家族、関係する家々の構成員が、上記仕事に携わる日数に関して、1920年代から戦時期にかけてカウントした。並行して、鉄五郎の家族の変化(結婚と妻の出産)を日記などから明らかにし、家族周期と仕事の担い手の変化を追究した。また、「手強い」や「雇い」などを通して取り結ばれる家々の関係性を検討した。

国内外の関連文献を講読し研究史のサーベイを行なった。生業史という視角からの研究は、日本中近世史研究を中心に研究が深化しているので、前近代史研究を含めて研究を講読した。また近現代史研究においては、生業史・生活史と関連する分野で、「生存」を対象とした歴史学研究が深化しているので、それらの研究を講読した。史料として用いる日記史料は、近年「エゴ・ドキュメント」として注目されているので、それらに関する研究を講読し、本研究との相違点を確認した。同時に、本研究期間に発表された「生きること」に関わる諸研究に関する書評を執筆することを通じて、最新の研究動向と自らの研究との交流を図った。

(2)2021年度(本格的には2022年度)から研究の方法を一部変更した。コロナウィルスの感染拡大が長期にわたって続き、当初予定していた日記史料に関する実地調査や聞き取り調査が2020年度から2021年度にかけてほとんど実施できなかったためである。同時に、研究の進展に伴い、男性の記した日記史料のみから生活世界を論じるのではなく、女性の記した一次史料に即してこの点を考えることも必要と考えるようになったためである。特に第二次世界大戦後の時期において、女性自らが家族の外に生活世界を広げる行動をとる点に注目し、この点に関する史資料収集調査を、立教大学共生社会研究センターをはじめとして、各地の図書館、文書館で行った。

### 4. 研究成果

研究成果に関しては、大別すれば、以下の二点にまとめられる。

(1)第一に、山間部に居住する石工の日記(『鉄五郎日記』)から読み取れる生業と生活、そして

それらを支える家族・社会関係とその動態についてである。1920年代から戦時期を分析した結果、明らかになったことは、以下の4点にまとめられる。

戦間期という時期に規定された自給的性格と商品生産の二つの性格を有する生業の具体像である。1920～1930年代の『鉄五郎日記』からは、「雇われ仕事」としての石工仕事などと共に、商品作物である茶や山葵、杉などの生産が確認された。同時に、自給用の麦や野菜の生産、焼畑による雑穀の生産、生産や生活に必要な山野における薪の採取と肥料に用いる草の採取、樹皮などの採取もみられた。商品生産によって得られた収入は、米などの日常物資の購入だけでなく、医療費や茶摘みの際の「雇い」への賃金のために必要であった。

このうち、商品生産、なかでも山葵生産に関しては、1920年代以後鉄五郎自らが新たに山葵田を造成するなど拡大傾向を示した。そのため、鉄五郎の商品生産に携わる日数は増加する一方、1930年代半ば以後において焼畑による生産は一旦みられなくなった。しかし、鉄五郎は生業を特定の商品生産に特化することなく、同時に石工の仕事を中心とする「雇われ仕事」も続けた。その主たる理由は、生業は基本的には自給的性格を有していた点に求められる。麦や野菜などの食料の生産だけでなく、山野からの薪・草・樹皮の採取とそれらの燃料、肥料、家屋などへの利用のように、生業は衣食住に直接結びついており、商品生産を増やしてもその構造を変えることはできなかったのである。生業を理解する上で重要なもう一つのことからは、運搬の重要性である。山野から集落までの生産物や採取した薪や草の運搬のみならず、街道筋から集落までの諸物資の運搬も、対象地においては道路が未整備であったため、主として人力によって行われており運搬を自ら担うことが生産と生活を成り立たせる上で必須であった。病気・けがの際には、医者や病人・けが人の運搬を複数人で担った点に鑑みれば、物資や人を運ぶことから派生する共同性は極めて強く、そのような共同性の上に、生業と生活が成り立っていた。

家族周期のもとでの生業と生活との緊張関係についてである。妻の妊娠・出産は、生業と生活との緊張関係をもたらした。妻は生業の担い手でもあり、妊娠・出産はこのことと競合するからである。これを回避するため、鉄五郎は妻の仕事を代替し、場合によっては家族外の「手伝い」・「雇い」を利用する策を講じた。しかし、このような方策は常に可能となるわけではなかった。昭和恐慌下において鉄五郎が泊まりがけで「雇われ仕事」に出かけた際や、家族が病気などの場合、生業と生活の負担は、妻や父母、さらには鉄五郎自身に（なかでも妊娠・出産を担った妻に）重くのしかかった。家族の複数名が病気になった際には、鉄五郎は、茶生産のうち茶もみ工程をアウトソーシングして生業を縮小しつつ、自らは家族の看病や飯炊きを行うなど生活を優先した。同時に、親戚や石工仲間とその家族による「手伝い」、「雇い」を得ながら、鉄五郎は生業と生活との緊張関係を乗り越えていった。

生業と生活を支える集落内における重層的な関係性である。鉄五郎は集落内上層から山葵田造成などの「雇われ仕事」を受けていたが、その収入は鉄五郎の生業と生活のために必要なものであった。同時に鉄五郎は茶摘みや農作業の際に、石工仲間やその家族などを「雇い」として用いることもあった。鉄五郎と集落内上層との関係や、鉄五郎が「雇い」として用いた家族との関係は、単なる雇用関係ではなく、冠婚葬祭の際の訪問や「手伝い」、病氣見舞いなどの生活上の関係性と重なっていた。すなわち、生業と生活との関係は、一家族のみで完結するものではなく、集落内における重層的な相互扶助の関係に位置づくものであった。

日中戦争期からアジア太平洋戦争期にかけての、応召や物資の動員などによる生業と生活の再編についてである。日中戦争開始後の応召によって、鉄五郎の実家における仕事の担い手の減少分を鉄五郎がカバーしようとした結果、鉄五郎の家仕事の負担は妻と第一子にのしかかるなど、戦時動員による影響が出始めた。鉄五郎の「雇われ仕事」も、1940年代に入って減少した。アジア太平洋戦争期に入り、「家仕事」に大きな変化が生じた。戦時統制のもとで主たる現金収入源の一つであった山葵生産の日数は減少した。応召によって鉄五郎の「家仕事」の担い手が減ったため、草刈りと肥料作りにかかる日数も減少した。そのため、集落に近い地点での焼畑による雑穀生産が行われるなどの対応が取られた。妻の妊娠・出産の際における鉄五郎や関係する家々による妻の仕事の代替にも限界が生じていた。アジア太平洋戦争末期においては、共同茶工場の建設により、茶もみ工程の外部化・共同化を図ることで茶生産の継続が試みられたが、結果として集落内の雇用機会は減少するとともに、集落外に転居する者も現れた。この時期において、集落内の家族や種々の社会関係に基づく生業と生活を支える機能は限界を超えた。戦時期の動員は、当該期における生業と生活の担い手に極度の負担を強いることとなり、同時に生業と生活それ自体を変容させたのである。

以上の点は、沼尻晃伸「山間部の一石工からみた生業と生活 一九二二 一九三七」(『日本史研究』720号、2022年)および同「戦時期における山間部の生業と生活」(社会経済史学会第91回全国大会自由論題報告、オンライン開催、2022年4月30日)などで発表した。これまで一次史料に基づいて十分に実証されることのなかった、戦間期・戦時期における山間部の生業と生活との関係を、それらの作業日数と家族内外の社会関係からミクロ的に解明するという意味で、新たな試みと位置付けることができる。

今後の課題として、日記記述として十分に利用できていない夕食後の日々の営みに関する分析がある。夕食後は、藁仕事など生業を考える上でも重要であり、また種々の用件による他家への訪問や他家からの訪問、集落での寄合、娯楽など、生活上の人々の関係性を考える上でも極めて重要であり、その動態分析を今後進めたい。

(2)第二に、生業や生活に必要な土地などの利用とその論理に関してである。この点に関しては『鉄五郎日記』とともに、女性が記した種々の文献史料を用いて検討を進めた。明らかになったことは、以下の二点である。

戦間期の山野の利用についてである。『鉄五郎日記』の分析から、1920年代において鉄五郎が草の採取などで山野を利用する際に、村の一員として共有地を利用するだけでなく、他人所有の山野を利用する場合もあった。その際、その山野の所有者と鉄五郎の関係をみると、山野の所有者は鉄五郎を自らの「雇い」の仕事に就かせていた。鉄五郎の側も、山野の所有者に対して「手伝い」など種々の関係性を築いた。その結果、鉄五郎は、山野所有者に、実際に所有者の山仕事を担える「価値ある存在」として承認されるようになり、そのプロセスのもとで、利用が可能となった。すなわち、土地所有者による利用者の承認と実際の土地利用とがセットになっていた。

高度成長期における水辺の利用についてである。東京都狛江町において、1970年に多摩川左岸堤防自動車道路建設計画を東京都が発表した際に主婦が住民運動を起こしてこの計画を中止に追い込んだ。主婦らは、子育ての際の遊び場・憩いの場としての水辺利用という経験を有していた。その経験に基づき、人々の憩いの場としての多摩川の水辺利用を「人間らしい願望」として位置付け、請願を市議会に提出した結果、自治体もこれを承認した。署名運動などを通して主婦らの主張が「価値ある利用」として広く認識されることで、町議会議員も主婦らの主張を承認し自治体もその主張を受け入れた。生活の上での水辺利用と、議員や水辺の管理者(自治体)による水辺利用者の承認とがセットになっていた。

以上の二点をまとめれば、家族の外側に広がる生活世界において、種々の関係性を築いていく上で承認が不可欠であること、その際に土地利用者は自らを「価値ある存在」(「価値ある利用」を担う存在)であることを種々の行動や主張を通じて広めることで、土地所有者・管理者に承認されたことが重要である。この点に関しては、沼尻晃伸「近現代日本の土地所有と共同性」(2023年度史学会大会公開シンポジウム、東京大学、2023年11月11日)において発表した。上記点と関連して、水辺利用以外の女性による自治体や企業などへ生活環境に関わる諸要求についても検討した。その結果、「価値の承認」は土地利用に限らず、高度成長期に広くみられ、1980年代に継承されていったがその後減少したこと、人びとの生活に根ざした「価値の承認」によって、地域社会の場において女性が自治体関係者や議員などと対等にふるまうことが可能となった点を、一般向けの図書において発表した(禹宗杭・沼尻晃伸『一人前と戦後社会』岩波新書、2024年)。

今後の課題として、戦前からの議論の積み重ねのある、入会林野の所持と利用との関係に関してや、近世史研究で進展している近世的土地所持・所有と近代との関連について、本研究成果を生かしつつ、研究を広げることが構想している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 沼尻晃伸	4. 巻 731号
2. 論文標題 書評 大門正克・長谷川貴彦編著『「生きること」の問い方：歴史の現場から』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 67-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 沼尻晃伸	4. 巻 1043号
2. 論文標題 「2023年度歴史学研究会大会報告批判（現代史部会）」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 45-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 沼尻晃伸	4. 巻 720号
2. 論文標題 山間部の一石工からみた生業と生活 一九二二—一九三七 — 『鉄五郎日記』の分析を通して—	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 沼尻晃伸	4. 巻 1025
2. 論文標題 書評 高柳友彦著『温泉の経済史：近代日本の資源管理と地域経済』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 47-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 沼尻晃伸	4. 巻 844号
2. 論文標題 書評 鬼嶋淳著『戦後日本の地域形成と社会運動：生活・医療・政治』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 105-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 沼尻晃伸
2. 発表標題 近現代日本の土地所有と共同性――水辺・山野利用と市街地形成――
3. 学会等名 2023年度史学会大会公開シンポジウム「土地所有の世界史」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 沼尻晃伸
2. 発表標題 戦時期における山間部の生業と生活―『鉄五郎日記』の分析を通して―
3. 学会等名 社会経済史学会第91回全国大会 自由論題報告
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 沼尻晃伸
2. 発表標題 「暮らしの場」における「一人前」の形成と変貌
3. 学会等名 社会政策学会第 144 回(2022 年度春季)大会 テーマ別分科会「戦後日本における「一人前」の形成と変貌」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 沼尻晃伸
2. 発表標題 戦間期・戦時期における山間部の生業と家族・社会関係ー『鉄五郎日記』の分析を通してー
3. 学会等名 2020年度政治経済学・経済史学会秋季学術大会 自由論題報告
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 禹宗ウォン・沼尻晃伸	4. 発行年 2024年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 267
3. 書名 『一人前 と戦後社会』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------